

ヒア・カムズ・ザ・サン

ケープ・カナベラルの夜風は晩秋だというのに生ぬるく、だけど不快感は覚えなかった。レジーナはフォンの灯りをたよりに適当な礎石を見つけると砂をはらって、海のほうを向いて腰をかけた。ぼくもおなじようにすわった。

ここ数十年の気候変動とメタンコントロールで、このあたりの海岸線はすっかり変わってしまっている。いま、ぼくが腰掛けているのも、かつてフォン・ブラウンの時代に使われていた歴史的ななにかなのかもしれない。

カバンの中から冷え切ったキューバサンドを取り出すと、ぼくはセブンアップで流しこんだ。隣でレジーナもなにかを食べているが、暗くてよくわからない。

フォンを消すと、あたりは星明かりだけになった。暗がりにだんだん目が慣れてくる。新月の晩の南天には冬の星座が宝石のようにかがやき、地平すれすれにはヤシの木のあいだから、エリダヌス座の一等星アケルナルがちらりと顔をのぞかせている。オリオンの足

もとあたりの空をながめながら、「エリダニ40」とレジーナがつぶやいた。

「ああ、あのあたりか。グレース先生のお手製プラネタリウムにもあったっけ」ぼくもそれに応じた。「いや、さすがにエリダヌス座はマイナーすぎるか。サンフランシスコからはアケルナルは見えないし」

「いいえ、ちゃんと載ってたわ。わたしは覚えてる。星座当てクイズでやったもの」とレジーナはいった。

ぼくはおどろいた。「よく覚えてるな。二六年も前の話なのに」

彼女は中学のクラスメイトで、ぼくらはじつに二六年ぶりの再会だった。といっても、別にロマンチックな理由があるわけではない。二週間後にここケネディ宇宙センターから打ち上げられる宇宙ミッションの関係者として、偶然顔を合わせたのだ。

向こうは、テニユアの赤外線天文学の教授。こっちは、つい半年までバイオ系ラボを渡り歩いていた元ポスドク。タウメーバ特需でようやくまともなポストにありつけたばかりだ。

だけど、専門分野があまりにちがうせいかな、それとも会うなりグレース先生の思い出話で盛り上がったせいかな、不思議とぼくらは十三歳の頃とおなじような感覚で話ができた。

まだ何ものでもなく、なんにだってなれる気がしていたあの頃のままで。……うん、これはこれで、ロマンチックというかノスタルジックかもしれない。

「いよいよね」と彼女がいった。

「うん」ぼくは発射台のありそうなほうに目をこらしてみたが、どれなのかわからなかった。

この浜辺から二週間後に打ち上げられるのは、宇宙船の一部だ。モジュールごとに打ち上げて、軌道上で組み立てていく。組み上がったら地球からうんと遠ざけたうえで、最後の最後にアストロファージ燃料を充填する。地上で組み上げないのはそれが理由だ。人類は、地上でのアストロファージの扱いにトラウマができてしまっている。とくに宇宙船がらみでは。でも、アストロファージの性質をよく知っているぼくとしては、そのくらいの慎重さがあったほうがいいんじゃないかと思う。やつら、光速の〇・九二倍の速度で移動できるっていうのは、なかなかおだやかじゃない。

\*  
\*  
\*

ぼくらが八年生だったとき、世界は一変した。正直、それより前がどんな世界だったのか、あまり覚えていない。

太陽が暗くなり、異常気象が拡大して、人類は食糧を十分に生産できなくなった。原因を探るうちに太陽から金星に伸びるペトロヴァ・ラインが発見され、そこに生きるアストロファージという人類史上初の地球外生命が見つかった。地球の近隣の恒星も暗くなっていること、しかしタウ・セチだけは被害をまぬがれていることがわかった。さらにアストロファージはおそろしく効率のいい推進剤や放射線防護材として使えることがわかり、あれよあれよというまにタウ・セチの有人探査計画、プロジェクト・ヘイル・メアリーが立ち上がった。

どういう経緯があったのかは知らないが、中学校でぼくらに科学を教えていたグレース先生が、〈ヘイル・メアリー〉の乗組員に選ばれてしまったのだ。困惑していた先生の顔を、いまでも覚えている。

ミッシェンの全貌を知った日、ぼくら生徒たちは怒りや悲しみをどこにぶつければいいのかわからなかった。往復二六年というのも衝撃的だったけど、乗組員は片道旅行で、ビートルズという四機の無人プロップだけが地球に帰ってくるという特攻ミッションだったのだ。いまなら燃料や重量の問題だと頭ではわかるが、当時そんなことはわからなかった。

た。非人道的ミッションだという感覚はどうしてもぬぐえないけど、なにしろ当時は世界中が“有事”の状態だった。人ひとりの命よりも人類滅亡を防ぐことのほうが、往々にして優先された時代だった。

結局ぼくらは話もできないまま、グレース先生は十二光年のかなたに旅立ってしまった。残されたぼくらは、先生とほかのクルーたちがなにか画期的な解決策を見つけ出して、ビートルズに乗せて戻してくれるのを待つしかなかった。

とはいえ人類も、二六年間、ただぼかんと口を開けて親鳥の帰りを待ってたわけじゃない。絶え間ない異常気象や疫病、軍事衝突に人類の大半のリソースを割かれながらも、人類は準備をおこたらなかった。ぼくらは青年期と壮年期をそんな営みのなかで過ごしてきた。

実際、人類はけっこうよくやったと思う。当初は一九年で人類の半数は死ぬといわれていたけど、アストロファージの異様に高いエネルギー効率を逆に利用することで、食糧の備蓄を予想よりもかなり増やすことができた。もつとも、オーガニックな合成でない農作物はまだまだ貴重で、ホールフーズでも目玉が飛び出るような値札がついている。ぼくみたいな安月給はウォルマートの合成野菜が唯一の選択肢だ。

〈ヘイル・メアリー〉出発からの折り返し点である一三年後には、ビートルズの帰還まで人類をなんとか持たせる目算がたち、太陽系に戻ってくるであろう四機のビートルズを確実に捕捉してやるための準備が本格化した。万が一取り逃がしてしまったら、〈ヘイル・メアリー〉のクルーの努力がおじゃんになってしまう。

地球の公転軌道に、一二〇度の間隔で三基の赤外線観測衛星——いや、もっと正確にいうと、ペトロヴァ光観測衛星——が配置された。太陽を中心に数億キロの正三角形をかたちづくる三基はそれぞれ〈リージェ〉、〈オリーシャ〉、〈ライランド〉と名づけられ、タウ・セチの方向を二四時間見張り続けた。ビートルズはおしりを太陽系側に向けて逆噴射することで減速する。その光をとらえようというのだ。地上の深宇宙ネットワーク<sup>S</sup>も、ほかのミッシェンの合間をぬって、ビートルズが電波で送ってくるであろう位置情報に忍耐強く耳をすませた。

そうしてついに、二六年目がやってきた。

最初にとらえられたのは、光点のほうだった。〈リージェ〉と〈オリーシャ〉の分光データには、はっきりとペトロヴァ光の特異なスペクトルが写っていた。〈ライランド〉がその榮譽にあずからなかったのは、たまたまタウ・セチが太陽の側に見える位置にいて

観測できなかったからだ。

ひとかたまりに見えた光点は、精密観測により三つの点の集まりだとわかった。三機だ！ 三機のビートルズが、けなげにもどうにかこうにか太陽系に戻ってきたのだ！ 残る一機がどうなったのかはわからないが、三機もいれば人類にはおつりが来る。光の青方偏移も、各機がほぼ正しいプロファイルでこちらに向かつて減速しつつあることを示していた。

十数日後、深宇宙ネットワーク<sup>D S N</sup>が、ビートルズ自身が天測した位置情報と、バースト的に送信されてくるストレージデータをとらえはじめた。位置情報はいい。予想通りだ。問題は……そう、ストレージデータの中身だ。たちまち全人類が、上を下への大騒ぎとなった。きなくさい世界情勢も完全に吹っ飛んでしまった。アストロファージ問題がかすんで見えるくらいの、コペルニクスの転回がそこには詰まっていたのだ。

人類には、隣人がいた。それも、たったの十数年で行けるところに。

しかも、最初にかれらと友だちになったのは、われらがグレース先生なのだ。ファース

ト・コンタクトだ。

そんなことって、ある？　一三歳のぼくが知ったら、いったいどんな顔をするだろうか。

なんとも現実味のない話だけど、グレース先生は、タウ・セチで異性種属のエンジニアとばったり出会ってすっかり意気投合して、ついにアストロファージ問題を解決する方法を“かれ”と共同で見つけ出したらしい。ビートルズからは、先生が保存したありとあらゆるデータが次々に送られてきた。ビデオ・レター形式の経緯説明にはじまり、日々の日誌、エリディアンという驚異の隣人の動画、言語、文化、キセノナイトという驚異の物質の物性、加工方法、タウメーバという驚異の……オーケイ、この調子だとキリがないからやめよう。ともかく、科学史が数世紀分は進んでしまうくらいの“タウペディア”がそこにあった。

そこから先は、報道されているとおりだ。

前もって全データを電波のかたちで受け取っていたぼくらは、地球―月圏から充分離れたところで三機のビートルズに無人機をランデブーさせ、そつと捕獲した。タウメーバが人類にとって致死性の生物ではなさそうなのはデータからわかってたし、もはや惑星<sup>プラネタリー</sup>



検査なんてあってないようなものだけど、やっぱり地球に野放しにしたくはないからね。これは、科学というよりは、気持ちの問題だ。

オランダと韓国の企業がタウメーバ農場をさっそく大規模化した。日本の素材メーカーがニュージーランドのスタートアップと共同でキセノナイトの量産体制をととのえた。エリディアンの存在は、既存の宗教や精神文化にけっこうな混乱をもたらしたけれど、まあ総体でいえば人類はそれなりに新事実を受け入れつつある。

ストラット国際宇宙研究コンソーシアムの主導で、金星周回軌道に八基の播種船が投入された。先月からペトロヴァ・ラインにタウメーバの制御播種を開始している。

いまのところ、効果は抜群だ——まるでシロアリ対策に駆除剤をまくみたいに、アストロファージの「巣」を直接たたくことで、金星から太陽に戻るアストロファージの数は激減した。太陽の光度も九七パーセントまで回復している。完全に元の明るさに戻るにはあと数年はかかりそうだけど、気の早い人類はもうお祭りムード一色だ。

タウ・セチでグレース先生が経験したことも、人類が得られた知見も、その後の展開も、まるでSFサイファイ小説でも読んでいるみたいで、ぼくはいまだに信じられなくなるときがある。だけど、これはまぎれもない現実で——科学はこんなふうにあつというまに世界の見え方

を変えてしまうんだ。もうぼくらは、前の世界にはもどれない。

\* \* \*

「ドップラー効果って習ったじゃない？ 八年生のときだったかな」潮風に乗って、レジーナの声がした。

ぼくらはとりとめもない会話を続けていた。夜の闇は深くなっている。潮の匂いも少し濃くなった気がする。いつのまにかアケルナルはヤシの木に隠れ、オリオンも西のほうに傾きつつあった。

「覚えてるよ。グレース先生、ぼくらを学校の外に連れ出して、パトカーのサイレンで実演してくれたんだったな」

あの授業を受けてから、こわかった夜中のダウンタウンの遠いサイレンがむしろ楽しくなったのを、ぼくは思い出した。

「ええ。サイレンが近づくときは音が高く聞こえ、遠ざかるときは低く聞こえる」

「そうだな。それが、どうしたんだ？」ぼくは彼女の話の意図をつかみかねていた。

「ヘリージエ」のことなんだけど」彼女は唐突に、ちがう話をはじめた。「ビートルズが

帰ってきてからは、太陽系のペトロヴァ・ライン観測用に転用していたのよね。だけである日、ふと思いついたの。久しぶりにタウ・セチの方向を見たら、もしかしてかれらの痕跡が見えないかしらって」

「さすがにタウ・セチのペトロヴァ・ラインは地球からは見えないんじゃないかな。星系全体が、一ピクセルに収まってしまいうしろ」

「それはそのとおり。実際、タウ・セチはいつもとなにも変わらなかった。……だけど、タウ・セチから数秒角のところに、光点が写ったのよ。画像解析AIがようやく検出できるくらいの、かすかな光点が」

「光点？ ビートルズを観測していた頃にはなかったのか？」

「ええ、過去のデータを全部探してみたけれど、そんな光点はなかった。わたしたちが目を離していた数週間のすきに生まれたことになる」

「遠くの銀河の超新星という可能性は？」 ぼくは、彼女がどう答えるか予想したうえで、わざとまぬけな質問を試みた。

「ありえないわ」 レジーナの声色は少しあきれているようで、ぼくは反省した。「超新星のスペクトルなら、ペトロヴァ・スコープに写るわけがないもの」

太陽やタウ・セチといった恒星が出す光は、幅広い周波数を含んでいる。太陽光をプリ

ズムや水滴に通すと七色の虹にわかれるのはそのためだ。だけどペトロヴァ光は特定の周波数成分しか持たない。プリズムに通せば、鋭いピークとしてあらわれる。だから簡単に見分けることができる。〈リージエ〉に搭載されたペトロヴァ・スコープは、特有の鋭いピークをもつペトロヴァ光だけを写すように作られていた。

「あの赤外スペクトルとエネルギー量は、自然現象ではありえない。あきらかに、アストロファージを大量にエネルギーに転換したときにのみ出る人工的な光よ」と彼女は力説した。「フル・スラスト時のアストロファージ・エンジンから出る赤外放射のエネルギー量は、太陽表面を凌駕するの」

「うへえ」とぼくは呻いた。「うっかり当たったら一瞬で蒸発しそうだ」

「たとえば〈ヘイル・メアリー〉の直径十数メートルのエンジンの光であっても、ペトロヴァ光に特化した光学フィルタと光電子増倍管を持つ〈リージエ〉なら、原理的には見えるはずなのよ」

「一二光年先でも!?!」

「ここ十年のペトロヴァ分光学の発展をご存じない?」

そうだった。あの頃の人類は生き残るために必死で、ペトロヴァ光マニアみたいになっていたんだった。そして、その先鋒にいたのが彼女なんだった。

「つまり、きみがいいたいのは……〈ヘイル・メアリー〉のエンジンの光が太陽系から見えただけのこと？」

「ええ」彼女はうなずいた。

「ワオ。だけど、エリディアン側の船のエンジンの光っていう可能性は？」

「それは考えた。ただどこかすかな光度変化を見てみると、きっかり三〇秒ジャストのサイクルで出力が制御されているように見えたの。人類とは異なる時間単位をもつ種属がつくったエンジンが、秒単位で動いているとは思えない。あれはやっぱり人類がつくったものだ、とわたしは結論づけた」

「なるほど。だとしたらすごいじゃないか、レジーナ。なぜ公表しないんだ？」

「ぼくはレジーナの優秀さに舌をまいた。ふと八年生の科学の授業を思い出した。実験中だけ盛り上がるほかの子どもたちとはちがって、彼女は実験後の雑多なデータを粘り強く解析するのが得意だった。解析結果をことさらに自己主張しないところも、いまとかわらなかった。」

「この話にはつづきがあるの」すごい発見をしたというのに、レジーナは淡々としていた。ぼくだったらすっかり浮かれてしまうのに。むしろ彼女は少し落ち込んでいるようにもみえた。「じつは、いちばん最初の撮像では、光点は写らなかった」

「久しぶりすぎて、撮像設定をまちがえたとか？」

「ちがうの。最初は分光フィルタのバンドパス特性をペトロヴァ光よりも短波長側に設定していた。だけど、逆に長波長側に変えてみたら、光点が写った」

「え？」

「赤、方、偏、移、よ」

ああ、なんてことだ！　ようやくぼくは気づいた。ドップラー効果の話は、終わったわけじゃなかった。ずっと続いてたんだ。

光源が遠ざかるときは、波長が長くなる。

「つまり……〈ヘイル・メアリー〉が地球から遠ざかろうとしているのに、いちばん最初に気づいたのは、きみだったのか」

昨年発表されたそのニュースは、またたく間に世界を駆けめぐって、多くの人たちに衝撃を与えた。だけど、その第一発見者がレジーナだったとは。

「ええ。偏移量は、エリダニ40に向けて加速する場合の計算値とぴったり一致したわ」彼女がいった。「例のテキストファイルを見つけたのは、そのあと」

レジーナが知っているのは、“タウペディア”の中でタイムスタンプがいちばん新しい、あるファイルのことだ。

ミススペルだらけのそのテキストファイルには、ただ数行、グレース先生が“友人”を助けるためにエリダニ40星系に向かうこと、地球には戻らないことにしたが心配しないでほしい、というようなことが、彼なりのいつものユーモアをもつて簡潔に記されていた。ぼくもいまだに、全文をそらでいえると思う。

「それも、きみの発見だったのか」

「そう。必死でさがしたものだ。——赤方偏移のことがなかったら、いまでも気づいていなかったかもしれない。なにしろファイル名が“新規テキストドキュメント・txt”だったし」

「それはひどいな。ぼくでも見落とすよ」

「でも、それを読んで、わたしがどんなに狼狽したかわかる？　だって、他の動画や日誌では、これから地球に帰るっていつてたのよ！」

「レジーナ……」彼女がこの大発見をなぜすぐに論文にしなかったのか、すこしわかった気がした。

“ロッキ”から燃料をわけてもらえることになったんだ、って。ビートルズを先に帰

して、ちょっと遅れて追いかけるから待っててくれって」

きつと彼女は、みずからの手で最終判決を下したくなかったんだ。

「サンフランシスコの海と山と空と坂道が恋しいって。帰ったらサリーズ・ダイナーのツーオーバーミディウムコンボに、奮発してパンケーキもつけるんだって」

自分の観測データの正当性は、彼女がいちばんよく知っているはずだ。だからこそ、それが確実な証拠となつて疑念を決定的なものにしてしまうのが——自分が最大の貢献者として関与してしまうのが、耐えられなかったんだ。

ぼくは、彼女を責められない。

「授業、途中で抜けてきてしまったから、もう一度ちゃんとやらないとなつて。最後はとっておきのタウ・セチ早押しクイズをやるから、準備しておけよって！」

そうだ。ほんとうに、レジーナのいうとおりだ。

彼女だけじゃない。ぼくだってそうなのだ。

かつての生徒に向けられたあの特別な動画を見て、再会をどれだけ待ち遠しく思ったことか！

退屈な中学校生活のなかで、いちばん楽しかったのがグレース先生の科学の授業だった。



一三歳という多感な時期に、先生の授業とその後の先生をめぐる顛末を間近で見ていたばかりの人生が、影響を受けないわけがない。先生は知らないだろうけど、あのクラスからSTEMの分野、とくにプロジェクト・ヘイル・メアリー関連に進んだやつは、ほんとうにたくさんいるんだ。赤外線天文学のレジーナと宇宙生物進化学のぼく以外にも、アストロファージ推進工学のトラン、温室効果制御のラリー、昏睡状態耐性マーカーのテレサ、自然酪農を復活させたアビー、ストラットのコンソーシアムを率いるハリソン……みんな、グレース先生が戻ってくるまでになんとか人類を立て直そうという一心で、それぞれの分野で必死にがんばってきたんだ。

だから、先生が地球から遠ざかってエリダニ40に向かっていると知ったとき、ぼくもほんとうにショックだった。ショックすぎて、ピペットチップの箱を全部ひっくり返してラボでわんわん泣いた。

事情があったのはわかる。タウペディアの他のファイル群はきちんと整頓され、目次までついていて、グレース先生の用意周到さを物語っていたからだ。グレース先生はきつと地球に向かおうとする途中でエリディアンの友だちの危機を知ったんだろう。テキストファイルのタイムスタンプを見る限り、軌道力学的にいつて後戻りできるタイミミングぎりぎりだったにちがいない。急いでメッセージを書いてビートルズのUSBに載せ、地球に

向けて飛ばしてから、友だちを助けに行っただろう。

ぼくだったら、とっさにそんな判断ができるだろうか？ うじうじと悩んでいるあいだに、友だちを助けるチャンスもビートルズを放出するチャンスも失ってしまうんじゃないか？ そう、まるで、いまのぼくみたいに。

「だからなのよ。……だからわたしは志願したの。ラテラルパス・ミッションに」

レジーナの声ではっとわれに返る。なさけなく感傷にひたっていたぼくをよそに、彼女の声はもう、持ちまえの芯の強さを取り戻していた。

ラテラルパス。

タウ・セチに挑む一か八かのヘイル・メアリーではなく、“隣人”に向けてつなぐための、横向きのパス。エリダニ40に向けて何度でも投げて、ゲームをつづけていくためのパス。その第一便。ほんとうはもっと長くて堅苦しい名前のミッションだけど、ヘイル・メアリーにあやかっただけはそう呼んでいた。

彼女は一息ついて、つづけた。「太陽光度が復活したという情報がエリダニに届くまで、いまから一六年。その頃にはたぶんグレース先生は、五十代になっているはず」

「高重力だし、さすがに身体にもガタが来ているだろうな」

「そうね。だから、もう戻ってくる気はないんだと思う」 星空をバックに、水平線のほうを眺めている彼女の横顔が、シルエットだけ見える。「もちろん太陽光度以外にも、いまの地球の状況をエリダニに向けて送信し続けているけど、やっぱり一六年かかるし、エリダの濃く濁った大気の底に届くかどうかはわからない」

「逆もおなじだな。いまごろ〈ヘイル・メアリー〉の噴射光が見えているということは、先生はまだ出発したばかりなんだ。エリダニに到着してから情報を送ってくるにしても、さらに一六年後になる」

「だけど、わたしはいまから何十年なんて待てない。だから、グレース先生に直接会いに行く。先生が生きているうちに」

レジーナは熱のこもった声でいった。

「わたしが見つけたい美しい赤方偏移を、同じ速さで追いかけて打ち消してやるの。それがわたしのほんとうの志願理由」

たぶん、近いことを考えたやつらが世界中にたくさんいたんだと思う。ただし、もう少し実務的な理由で。

グレース先生と“ロッキー”の交流をデータから紐解くかぎり、エリディアンは人類と

メンタリテイに近いし、今後宇宙の友人としてうまくやっていけそうな気がする。しかし、往復三二年という距離はあまりにまだるっこしい。グレース先生が元気でいるうちに人類が複数人で何回か訪問して、国交？ いや、星交になるのかな？ ともかく仲良くなっておかないと、いろいろとまずい。その際には、グレース先生に通訳になってもらう必要がある。もしも先生に万が一のことがあつて、向こうに誰も知り合いがない状態で訪問したとしたらどうだろう。……少なくともぼくは、先生なしにまったくうまく行く気がしない。

早く行動すればするほど、お手玉がもらえる——早押しクイズで学んだ、宇宙の普遍的真理だ。そして、先生に残された時間は限られている。

だから、いまから使節団を複数回にわけてエリドに送るのだ。それがぼくら人類の出した答えだった。そのための船のパーツの一部が、二週間後、この浜辺からはじめて打ち上げられる。八カ月かかる組立の最初の一步だ。

レジーナはみごと、第一便のメインクルーに選ばれた。ぼくはといえば、バックアップクルーだ。そして第一便が出発したら、すぐさま今度は第一便のバックアップクルーが第二便のメインクルーになって、出発準備にかかる。太陽系とエリダニ40との位置関係から、出発のチャンスは年に一回。つまり僕もレジーナの一年後には、彼女たちを追いかけてい

くことになる。

いまのぼくはもう、グレース先生のメッセージを見て大人げなく泣いたりしない。むしろ先生の確な判断と隣人愛を、誇りに思っている。先生がエリドを訪れた最初の人類でよかったと心から感じている。レジーナもおそらく、そうなんだと思う。

だけど、レジーナはきつと人一倍、この使節団に掛ける思いが強いのだ。彼女は赤方偏移の第一発見者だ。だからこそ、自分自身で物理的にそれを打ち消したいのだろうし、彼女にはその権利があつてしかるべきだ。

「やっぱりな。ぼくもだいたいそんなところだ。いまが先生に会いに行く最後のチャンスだと思つてね」

すでにぼくらは、人生の折り返し地点をすぎている。船内時間は数年だが、地球に残していく家族や友人たちには三二年間の留守番を頼むことになる。もう会えないかもしれないが、覚悟のうえだ。

「もつともぼくは、レジーナのようなすごい成果はなにも出せていないけど」

ずっと水平線を見ながら話をしていた彼女が、こつちを向いたように感じた。いつのまにか、視覚に頼らなくても、彼女のようすがなんとなくわかるようになった気がする。

「いまさら、なにを謙遜してるの。いまや、あなたは世界の比較宇宙生物学を牽引している。タウメーバの第一人者でしょう。胸を張りなさい」

比較宇宙生物学は、生まれたばかりの新しい分野だ。人類はようやく、思弁的ではなく具体例をもって、地球生命とそれ以外の生命とを比較できるようになった。もっとも、ぼくらとエリディアンとタウ・セチの生命は、遠い昔に枝分かれした兄弟であるという説が、いまのところかなり有力ではあるけれど。

「オーケイ。ありがとう、レジーナ」とぼくは肩をすくめた。「まあ、ぼくの数少ない武器だしね。これがなくなったら、あとはマッケンチーズ作りくらいしかやれることがなくなってしまう」

「あなた、なんだかグレース先生に似てきてるわよ」とレジーナが苦笑いした。

「ワオ。どのへんが!」まんざらでもない。先生はぼくのヒーローであり、憧れだったのだ。にやつきがおさえられない。「顔? ……じゃないよね」

「しゃべり方とか、ものの考え方とかね。タウメーバと毎日じゃれ合っているとこういう感じになるのかしら?」

「<sup>けいだい</sup>継代のたびに、ぼくのかわいいタウメーバたちに声をかけているからね。オーケイ、みんな、きょうは分裂してみよう! いちばん早く増えたチームがお手玉獲得だ! って

ね」グレース先生の口調をまねてみる。……おっと、スベったかな。レジーナの表情はまだよくみえない。だけど、ちよつと笑ったような気がする。

それにぼくが日々こんな感じでタウメーバを扱っているのは、ほんとうのことなんだ。先生の科学の授業で感じたワクワクに突き動かされて、ぼくはいま、ここにいるのだから。「——先生はずつと、ぼくの理想だった。かなり影響されてるのは否定できないな」

「じゃあ、あなたもきつと、よい教師になれるわね」

「そうかなあ」

「わたしたちは、グレース先生のことを直接覚えている最後の世代になろうとしてる。それを次の世代に伝えていくのも、わたしたちの仕事。先生の、ものの考え方も含めて、ね」

レジーナはそういうと、天文薄明が終わろうとしている東の空をだまって見すえた。大西洋と空の境界がうすぼんやりと白みを帯び、季節外れの春の星座は輝きを失いはじめていた。

しだいに優位になってきた視覚で、彼女の横顔をそつとうかがう。

おだやかな決意の色が浮かんでいるのが、ぼくにはもうはつきりとわかる。

まもなく、地球にいちばん近い恒星が、今日も水平線の向こうから昇ってくる。九七パーセントまで復活した光度で、この世界を満たそうとしている。

長かった夜が明けようとしているのだ。

ぼくらは、もう、だいじょうぶだ。

ふと、この感覚をいつか、ぼくらの“隣人”とも共有できたらいいな、とぼくは徹夜明けの頭でぼんやりと思った。

(了)